

翻 訳

三つの家モデル ― 情報収集のツール

井 上 直 美
井 上 薫

目 次

訳者解説

1. 本著作について
2. 著者について
3. 「三つの家」モデルとは
4. 翻訳のねらいと意義

「三つの家」モデル 情報収集のツール

はじめに

実践への適用

1. 子ども/青少年
 - A. 青少年
 - B. 子ども
2. 親/保護者
3. ワーカー

引用文献

訳者付記

訳者注

訳者引用文献

訳者解説

1. 本著作について

本稿は、次の著作を翻訳したものである。Nicki Weld & Maggie Greening (2005) *The Three Houses model - a tool for gathering information*. 2005 conference paper, Signs of Safety Gathering England. 本著作は、2005年8月にイギリスのゲーツヘッドで行われたサインズ・オブ・セイフティ・ギャザリングで配布された関連論文収録CD「サインズ・オブ・セイフティ」に収められていた。

2. 著者について

著者の Nicki Weld と Maggie Greening はともに女性で、ニュージーランドの「子ども・青少年・家族局 (The Department of Child Youth and Family Services)」の「学習と専門教育 南部」に所属する上級ソーシャルワークトレイナーである。Nicki Weld とは、2005年8月のサインズ・オブ・セイフティ・ギャザリングで会った。Nicki Weld は、「ニュージーランドの子ども・青少年・家族局におけるストレンクスに基づく実践とサインズ・オブ・セイフティの適用の行程 (The journey of strengths based practice and application of the Signs of Safety within the Department of Child Youth and Family Services in New Zealand)」というチーム発表を Cherie Appleton と行っていた。

3. 「三つの家」モデルとは

「三つの家」モデルは、マオリ族の健康モデル、レジリエンシー (resiliency) 理論、解決志向理論、サインズ・オブ・セイフティ・アプローチ、ストレンクスアプローチの考えを理論的背景にして、ニュージーランドのソーシャルワーカーである著者たちが創った情報収集ツールである。クライアントとのラポールを築き、クライアントとの協働や、クライアントの視点からの情報収集を行う面接で使われる。

その大きな特徴として、二つのことがあげられる。まず、このツールでは、個人や家族を「家」として外在化して質問していく。「家」は、たいていの人に理解される象徴であり、近隣やコミュニティの環境の一部でもある。この「家」は「脆弱性 (弱み) の家」、「ストレンクス (強み) の家」、「希望と夢の家」という三つに分かれていて、問題とストレンクス、将来の解決像を聞いていくことになる。ストレンクスとは、個人や家族、その周りにあるプラス面を広く言う。二つ目の特徴として、子ども、青少年、家族、そしてワーカー、つまり関わる人全てにこのツールを用いる。個別の面接でじっくりと聞いて描いたものを、合同の場で見せ合って関わる人全ての情報を合わせることができる。これらの特徴が、援助専門職が一方向的に情報を聞き出すのではない、クライアントと一緒に情報を整理して将来を考えるパートナーシップの面接を可能にする。著者がこのツールに託す思いは、次のように表現されている。

「私たちは、当局の注意を引くことになった子ども、青少年、家族の声を聞き、彼らのゴール、希望と強みを認識するのにこのツールが役立ってほしい。(…中略…)何が子どもたちに危険や危害をもたらしているのかに関する会話は不可欠である。しかし、子どもたちが危害を与えていない時間は何が子どもたちを安全に保っているのか、子ども、青少年、家族はどうやって苦難をしのいでいるのか、家庭におけるポジティブな面とネガティブな面、ワーカーがどんなふうに関わる役に立ったり邪魔になったりしているかを見なければ、十分な安全アセスメントをしたことにはならない。(…中略…)リスクだけを見ていると、子どもたちや青少年に安全を提供しようとする家族に内在する何かを見逃してしまう。ソーシャルワーカーが自分の視野を拓げるのに、三つの家は役立つツールである。」(Weld, N. & Greening, M. (2004)¹⁾)

4. 翻訳のねらいと意義

近年、社会的な要請の高まりと法体制の強化によって、日本の児童相談所には、要保護児童の通告を受け、調査を行い、保護者の意に反しても一時保護を行い、子どもの安全を確保することが求められている。保護者はそのとき自分たちの生活や人生を否定されたように感じ、受け入れ難い現実と直面させられての否認、混乱、怒り、抵抗が生じ、保護者と児童相談所を含む要保護児童対策機関との対立関係が始まることが多い。

しかし、安全確保のために家庭から離れて育つ子どもたちも親とのなんらかの関係調整が必要であり、親権者不同意の施設入所に関する家庭裁判所の審判の有効期限は2年とされ、児童相談所は保護者に対して家族再統合に向けたプログラムを準備しておくことが必要になってきている。また、通告後の児童相談所の処理状況から言えば、81%が在宅での面接指導である（厚生労働省2005年度福祉行政報告例）。このようなことから、家族が日々の大変な生活の中で子どもに安全に接していけることをめざして、家族の主体的な力を引き出すことが大変重要となってくる。

家族の主体的な力を引き出すためには、問題とされていることとうまくやれていることの両面から家族が自分たちの状況を理解し、最低限求められる子どもの安全と自分たちが望むことを達成するために、援助専門職と協力して家族が力を発揮できるように支援することが必要である。このような支援のアプローチは、「家族の持っている良好な機能に注目してエンパワメントすることによって、問題への対処能力の向上を図り、変化をサポートしていく（菅野、2007）²」ストレングスアプローチと言われている。具体的には、例えば家族との面接で、リスクだけでなくストレングス（うまくいっていること）の情報について話し合い、家族にも自分たちの状況を整理し、どうしたら安全な生活にしていけるかを考えてもらい、一緒に安全計画を作るやり方である。

一般的なストレングスアプローチには、ソリューション・フォーカスト・ブリーフ・セラピー、ナラティブ・セラピー、認知行動療法、心理教育、ソーシャルスキルトレーニングなどが含まれる。これらは、ソーシャルワーク領域のみならず、臨床心理領域でも発展してきている。子ども虐待に特化したものでは、サインズ・オブ・セイフティ・アプローチ、ファミリー・グループ・カンファレンスが挙げられる。サインズ・オブ・セイフティ・アプローチは、家族とのパートナーシップを重視する子ども虐待ケースマネジメントの手法であり、子ども虐待が急激に社会問題化した日本の現場で、多くの児童心理司や児童福祉司に取り入れられつつある（井上・井上、2007）³。

「三つの家」モデルは、Andrew Turnell が日本で行ったサインズ・オブ・セイフティ・アプローチのワークショップの中で2004年、2006年に紹介した。ツールが具体的でわかりやすいことから、ワークショップへの参加者が各自の解釈と工夫で積極的に使い始め、本邦初の事例発表も行われた（宮井、2006）⁴。また、筆者たちが2006年から始めたサインズ・オブ・セイフティ研究会で著者の許可を得て一部改変した「三つの家」モデル図を、菅野（2006）が全国児童心理司会報で紹介している⁵。このモデル図を図1、図2、図3に示す。

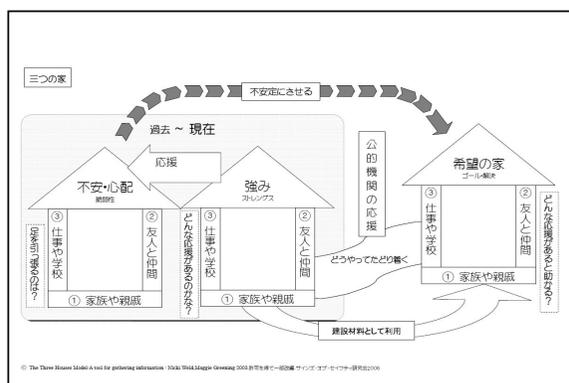


図1 三つの家 (概念図) (Weld, N., Greening, M. 2003, 許可を得て改変)

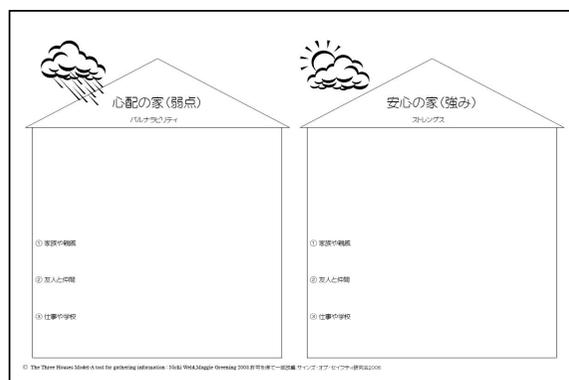


図2 三つの家 (面接用1) (Weld, N., Greening, M. 2003, 許可を得て改変)

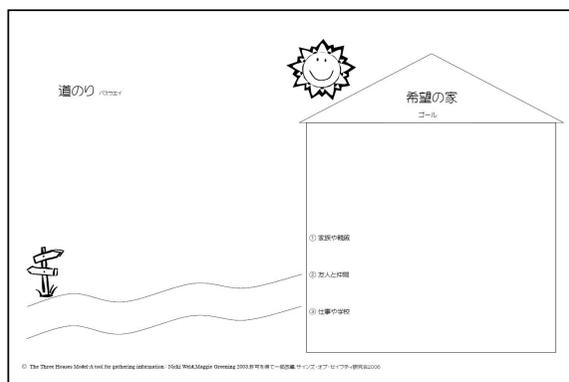
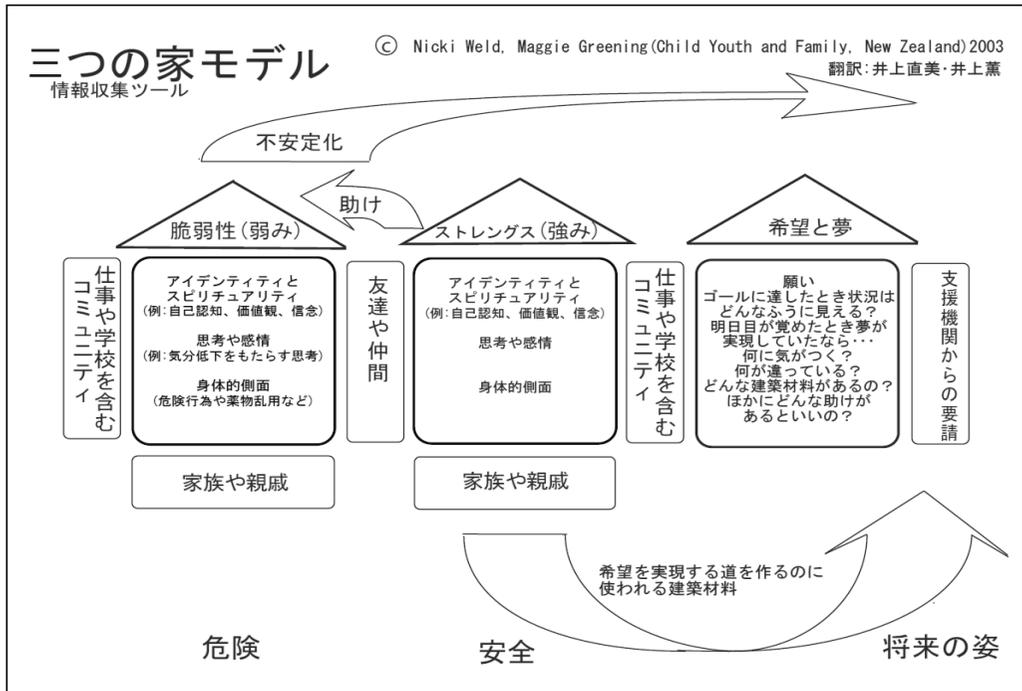


図3 三つの家 (面接用2) (Weld, N., Greening, M. 2003, 許可を得て改変)

このように、「三つの家」モデルは、心理職と福祉職がチームで対応することが多い子ども虐待対応の現場で、心理職にとっても福祉職にとっても有効な面接法として急速に広まりつつある。したがって、著者による詳しい手引きを早急に翻訳することが有意義であると考えた。

「三つの家モデル」— 情報収集のツール



はじめに

「三つの家 (The Three Houses)」は Te Whare Tapa Wha の概念 (Mason Durie 教授), リジリアンシー理論, 解決志向理論 (Steve De Shazer & Insoo Kim Berg), サインズ・オブ・セイフティ・アプローチ (Andrew Turnell & Steve Edwards) から発展した情報収集ツールである。このツールは、「脆弱性 (Vulnerabilities) の家」、「ストレンクス (Strengths) の家」、「希望 (Hopes) と夢 (Dreams) の家」の三つの家に分かれている。また、描かれたゴールを達成するために必要な介入ステップのあらましを記述する「道のり (pathway)」も含む。このツールは、子ども/青少年との面接、家族との面接、ソーシャルワーカーとのスーパービジョンに適用される。このツールは、関わる人々すべてが相互に影響しあう力を再認するシステム的な視点のもとに機能し、一人ひとりの三つの家を持ち寄って解決構築や介入の展開に役立たせることをめざす。

実践への適用

「三つの家」はどんな順序で記入してもいいし、ワーカーがそれを選んだ理由や情報を用いる目的も含めて、クライアントとオープンに話し合うのがいい。クライアントの見方が理解されると同時に、それがワーカーの考えの一助となるように、ワーカーとクライアントと一緒に記入するようにデザインされている。しかし、ワーカーの主な役割は、「三つの家」の完成を促進することであり、絵、ことばなど役立つ媒体なら何を使ってもよい。

1. 子ども/青少年

A. 青少年

1 番目の家 — 脆弱性

脆弱性は、青少年が危害をこうむるリスクを高めるすべての事柄を含み、それらは青少年の内側にも周囲にもある。脆弱性は、心理的なものであると同時に社会的なものでもあり、青少年自身の意見や判断であると同時に周りの人の意見や判断でもある。まず、はじめに、青少年に意見や判断を述べる機会を与えて、それからワーカーが自分の意見や青少年の周りにいる人たちの意見を付け足さなければならない。「脆弱性」という言葉を使うことで、潜在的な非難や恥を少なくし、誰でもが人生のさまざまな時点で脆弱になり得ることを認めることができる。

脆弱性の家の内側では、最初の構成要素として、スピリチュアリティあるいはアイデンティティに焦点を当てる。これは青少年が自分のことをどう見ているか、周りの人が青少年をどう見ているかであり、肯定的な自己認知ではなく、青少年や周りの人に危害をもたらすようなアイデンティティや同一化に着目する。このようなアイデンティティの認知が重要であり、青少年の脆弱性の核になる。

次の構成要素は、危害をこうむるリスクを高めることになる青少年の思考と感情である。これらは、特定の状況に関係しているかもしれないし、青少年の気分や行動に影響しているかもしれない。ここで重要なのは、青少年のそういう思考と感情が何につながっているか、そういうつながりが最もよく起こりやすいのはどんな状況かを、ワーカーが見出すことである。

最後の構成要素は、身体的健康に関するもので、性的な行動、健康管理、身体の調子に悪影響を及ぼす行動を含む。たとえば、薬物乱用や意図的な自傷のようなリスク行動をここに入れなければいけない。ワーカーはここで、観察してきた問題のうち、青少年がはっきり言えないあるいは言いたくないものを、ワーカーの意見として付け足すといい。

脆弱性の家の外側は、外的な脆弱性の壁に取り囲まれている。まず、家族の壁から始める。青少年の家族内にあることで、危害のリスクを高めるような事柄がここに入る。たとえば、青少年に害になるような対応をする、違法な行動や危険な行動を是認するなど、家族が青少年を扱う具体的なやり方が挙ってもいい。青少年にとっては、家族はないも同然とか、いてほしくない存在

かもしれない。ここでも、自分が見ているものを述べる機会を最初に青少年に与えたあとで、ワーカーや他の人の見方を付け加えることができる。

次の外壁は、青少年の友人や仲間関係をあげ、友人や仲間の行動がどのように青少年の脆弱性を高めるかを描く。ここでは、危害を増やすような友人や仲間の行動や、彼らの青少年への影響をあげる。彼らが青少年に与えるメッセージのうち、青少年が危害から安全な距離をとるのを妨げているものをはっきりさせる。

最後の外壁は、コミュニティ、仕事、学校に関連する。コミュニティ、仕事、学校が欠けていることがはっきりすることになるかもしれないし、青少年にとって助けや支えにならない環境がはっきりするかもしれない。青少年に自分の言葉でこれらをあげてもらい、それらが今は青少年の支えになっていないのはなぜかを聞き取ることが重要である。

2 番目の家 — ストレングス

ストレングスは、変化と安全の構築に貢献するよう建設的に活用することができる要因をさし、個人的な属性、価値観、信念、性格、態度、保護要因などを含む。それらは「固定的な」属性である必要はなく、どこでどうすれば効果を発揮させることができるのかを定めるためによく話し合わなければならない。本質的には、それらはリソースの集合であり、いろいろ話し合うことで変化への可能性を有効にすることができる。

ストレングスの家の内側では、内的なストレングスを挙げてもらう。脆弱性の家のときと同じようなプロセスで、スピリチュアリティあるいはアイデンティティの構成要素から始める。建設的で、青少年に危害から安全な距離をとらせるのに役立つようなスピリチュアリティあるいはアイデンティティに力点を置く。自己認知を引き出し、自己の核に焦点を当てる。「会ったことのない相手に自分のことをどんなふうに話しますか?」「自分のいいところはどんなことですか?」が鍵の質問になるだろう。

2 番目の構成要素として、建設的で、青少年が自分のことをよく思えるのに役立つような思考と感情に関する情報を集める。これは青少年の自己メッセージであり、ここでワーカーは、どういう状況で自己肯定的なメッセージが青少年に生じるかを見出さなければいけない。ワーカーはまた、ワーカーの見方を伝え、青少年がリアルに感じられるような具体的な例を挙げるといい。例えば、「君はいいお兄さんだね」というかわりに、「弟が自分なりの言葉で気持ちを訴えようとしたら、君は耳を傾けて注目してやっていたね。弟はそのことで自分の気持ちをわかってもらえたと思えるだろうし、私はそういう君の様子を見ると、本当にえらいなと思うよ」と言える。

3 番目の構成要素は、青少年がどのように自分の身体をケアしているかをみるもので、もし青少年が薬物乱用やアルコール乱用のような危険な行動をしている場合は、「例外」を探すようにする。基本的なセルフケアについて話し合って、青少年が個人的な健康法、健康な性行動といったセルフケアを達成している場合は、それらを明らかにしておく。

ストレングスの家の外壁は、脆弱性の家と同じで、家族が青少年に提供するストレングスから

始める。これらのストレンクスは、十分な保護になっていなくても、青少年の安全を保つことに関係していればいい。外壁に積み上げる材料と説明してもいい。例えば、母親は息子が学校から安全に帰宅したかどうかを確かめる電話を職場からかけるが、息子は母親が帰宅するまでの長い時間一人にされているというような場合が、その例にあたるかもしれない。ワーカーは、青少年の家族に見出すストレンクスをよく考えて、必要ならそのストレンクスが誰に由来するものかを聞きだす必要がある。

次の外壁は、青少年の友達に由来する、安全をもたらすストレンクスである。ここでも詳細に描かれることが必要で、とりわけ誰が安全に貢献しているのかが確かめられる必要がある。親密な関係がここで明らかになるので、ワーカーは、何が提供されるかに焦点を当て、誰ということには非審判的であったほうがよい。ここでは友達に関する情報が集められるので、青少年がとらえたままに記録されるのがよい。

最後の外壁は、コミュニティ、学校、仕事などの環境がもたらす安全についてとりあげる。建設的な役割モデルや、そのモデルが持つ属性をリストアップする。青少年の一日に構造と文脈を与えるようなシンプルな事柄を引き出して、ワーカーがそれらをよく見通せるといい。

3番目の家 — 希望、夢、ゴール

3番目の家は、希望、夢、ゴールの家である。ここでは、クライアントは自分の生活や家族に対する願望を話す機会をもつ。そうすることで、状況は変わるという希望と可能性の感覚がクライアントに生まれる。ワーカーにとっても、今ある問題から離れて、クライアントのことをじっくり見て、耳を傾けることができる機会となる。

それは、青少年が持ちたいあるいは住みたいと願う家または家庭であり、青少年がそうなりたいと願う人間であり、青少年のゴールが実現し得る場所である。そこはどのようなところで、自分自身と世界はこれまでとどう違ってほしいのかが重要である。ここは、ミラクルクエスチョンから始まる三つのシンプルな質問で聞く。

- i. 「もし明日目ざめて、あなたが本当になりたいと思う人間になっていたら、自分は前と違っているんだということにどうやって気づくかしら?」「そうなったとき、あなたはどんなふうに感じていたり、どんなことを思うかしら?」「何がこれまでと違うのかしら?」
- ii. 「他の人たちは、あなたが前と違っていることにどうやって気づくかしら?」「他の人たちは、何を見て、あなたが前と違っていることがわかるのかしら?」
- iii. 「思いつくことを全部、3番目の希望と夢の家の中に書くか描くかしてね」と青少年に言うこと。
- iv. 「あなたの周囲の人やものを三つ変えることができるなら、何を変える?」「そうなったとき、周囲の様子が前とは違っていることにあなたはどうやって気づくかしら?」「何が変わったとあなたは気づくかしら?」
- v. 「他の人たちは、あなたの世界の何が前と違っていると気づいたと言うかしら?」

vi. 「思いつくことを全部、3番目の家の周囲に描いてね」と青少年に言うこと。

vii. 青少年の絵と一緒に眺めて、それから次のように聞くとよい：

「2番目のストレングスの家をじっくり見て、2番目の家のどんな材料が3番目の家を建てるのに使えるかしら？」

「1番目の脆弱性の家を見て、1番目の家の何が3番目の家を不安定にするかしら？そして、2番目の家はどうやってそれを支えるのかしら？」

最後に、次のように聞く：「あなたがこの家を建てるために、他にどんな助けが必要かしら？」そして、出てきた考えを3番目の家の周りに加える。これらには、児童保護機関、プログラム、セラピー、行動戦略、人々、先輩、家を強く保つ保護的要因などが入る。それから、ストレングスの家と、希望と夢の家の周囲に書かれた情報を活用して、希望と夢の家を建てる道のりについて細かく考えることができる。この道のりをさらに、親/保護者の情報、ワーカーの情報、他の機関の情報をを用いて、発展させる。達成可能で測定可能なスモールステップを含むようにすること。そうすれば、変化に気づくことができ、どの地点にいるかを評価することができる。

B. 子ども

子どもと行う場合は、情報を集める目的はそのまま、三つの家のコンセプトを単純にしてひとつの家に入れ込む。三つの家のコンセプトは同じではあるが、複雑さは減ることになる。

ワーカーは、子どもの発達面を考慮に入れる必要がある。6歳前後くらいからの子どもはたいがい単純な家の絵を描けるが、家という概念がわかるのかをチェックしなければならない。

子どもとの三つの家は、子どもに「あなたの家を描いて」と頼むことから始める。ワーカーは、適切な言葉づかい、肯定的な口調、子どものレベルに降りること、自然で調和的でありながら子どもへの熱心な関心を示す、といった基本的な関与スキルを丁寧に用いることが重要である。

子どもが家を描いたなら、ワーカーは、子どもに「その家に誰が住んでいるの？」と尋ね、その人たちを家の中に描いてもらう。子どもが描いている間、「このひとは男の子？女の子？」、「年はいくつくらい？（これは小さい子には難しいかもしれない）」、「家の中にはペットはいるの？」など、描かれた人々に関する一般的な質問をする。

それから、「家の中ですることで好きなのはどんなこと？」と聞き、いくつか子どもに話してもらう。これによって、活動や興味など一般的なことに焦点をあて、子どもにも答えやすく、ちょっとした自信や熟達感を引き起こすことができる。「それは誰とするの？」、「友達とかでは誰が家に来るの？」と聞くこともでき、その子どもの世界には他の誰がいるのかがわかり始める。

それから自然な流れあるいは新しい質問によって、ワーカーは、「家の外ですることを描いて」と子どもに頼む。これらには、親戚や、学校や幼稚園、スポーツ、クラブなどが含まれるであろう。「学校ではどんなことをするのが好き？」「誰のところに行くの？」「学校ではどんな友達と遊ぶの？」「学校の外では？」というような質問が一般的で、家の外側で何が起きているのかを理解するのに役立つ。まず開かれた質問を用いて、子どもの絵に現れる子どもの情報に基づき、探

索的な質問を続けるのがいい。

子どもと一緒にその絵をじっくり見て、ワーカーと子どもが正しい情報を得ているかをチェックする。そうすることで、ワーカーが子どもの話をちゃんと聞いたことを示しながら、細かいところを明らかにすることができる。ただし、ここでも発達面の考慮は必要である。

それから、「家の中に描いたことでは、どんなことでうれしくなったり楽しくなったりするの？」と子どもに聞き、その横にお日様が笑顔子どもに描き加えてもらう。代わりに、笑顔シールや熊ちゃんシールのセットを使って、シールを絵の上に貼ってもらってもいい。おそらくそれらは、子どもの生活の中にいる人々や、ペット、行動や活動に関することであろう。さらに、家の外側に描いたことに対しても、この質問を繰り返す。

それから、「誰でも家の中でも外でも悲しくなるようなことが時々起きるよ」と話してから、「あなたの家庭や家庭の外で悲しくなるようなことがある？」と子どもに聞く。

注意事項：ここで子どもが新たな虐待を明かしたなら、ワーカーは、優しく子どもの感情を肯定し、「このような悲しみを持つ子どもを助ける特別な仕事をする人に話すといいよ」と説明する。そうでないなら、悲しくさせる人や活動の横に小さな雲や悲しい顔を子どもに描いてもらう。悲しい顔やしかめっ面の顔のシールを使っていい。このとき子どもが悲しくなるなら、子どもの感情を肯定し、サポータップに接する必要がある。

悲しみの源がはっきりしたなら、「ここに描いた太陽や笑顔のなかで、悲しい顔や雲を助けてくれるものがある？」と子どもに聞く。これによって、ワーカーは、子どもを助けるために未来に使えるかもしれないストレングスのアイデアを得ることができる。

それから、子どもが家を描いてくれたことをねぎらい、絵の中で何か足りないと感じるものは他にないかを聞く。「あなたはあなたの家と家の周りのことを私に描いて教えてくれて、すごい仕事をしてくれたわ。他にも何か絵の中にあるといいなと思うものはある？」と聞くのがいい。これは、子どもが何か望むことを付け足し、ワーカーがそのことをオープンに聞く機会となる。

子どもと「三つの家」をやると、ワーカーは、子どもの家庭や外の世界をよくわかることができ、しかも子どもを脅かすことなく、子どもにリードされて、その情報が集まることになる。子どもの絵は、収集された情報の全体を構成するひとつの家としてとっておくようにする。

2. 親/保護者

危害やその時点での懸念をアセスメントする初回面接質問の後で、親が状況をどう見ているかという情報を集めるために、「三つの家」を用いる。「三つの家」は、児童保護機関が進める質疑応答のように親に感じさせないで、親が自らの意見を出していく機会を創り出す。

第2の家 — ストレングス

ワーカーは三つの家の様式を示してから、親/両親に、家の単純な外枠（アウトライン）を書いたものを示して、「これは家族が住む家だと想像してください」と言う。第2のストレングス

の家から始めて、ワーカーは、「初めて会う人に自分たち家族（あるいは家庭）のよい（肯定的な）面をどんなふうに話されますか？」と尋ねて、親/両親によく考えて答えてもらう。ワーカーは、「『私たちには強い絆があります』『私たち、強い家族です』『私たちは、強く結ばれている』などと言う家族もありますよ」と例をあげて、親に促す必要があるかもしれない。これは、家族が、自分たちに好意的な他者との関係から自分たちをどう見るかという、家族のアイデンティティを引き出すためである。ワーカーは、もし誰かがたまたまその家族を見て、その家族のストレングスに注目したコメントを言うならば、という他者の視点で家族を見ることができる。

そして、ワーカーは、思考と感情を見ることに移り、それを家庭内の関係性に結び付ける。ワーカーは「家庭内でうまくいっているのは誰と誰ですか？誰と誰が近い間柄ですか？誰が仲がよいですか？」と質問する。ワーカーは、家族の中で仲のいい人たちが持つ思考と感情で、どんな思考と感情が困難に対処する相互作用を促進するかを描くことをめざすとよい。ワーカーは、親/両親のほうに戻り、彼らが自分たちをこの絵の中にも含めるようにする。例えば、夫婦関係や、他の人との関係における彼らの役割など。特にワーカーは、前向きで子どもを安全に保つために親が用いる養育スタイルについて、直接的な質問をする必要がある。ストレスへの対処に関する個人的な特質が、ここで列挙されるべきである。ワーカーは、こうした情報から、関係性、相互作用、行動がどんなふうに皆を安全にしているかを常に描く必要がある。もし多くの困難があり、そして肯定的な相互作用の例をあげることが難しい場合には、ワーカーは困難がなかった時の状況や、そういうときには何が違っていたかについて質問をする必要がある。

第2の家の最後の構成要素では、収入を含めた物質的な環境について聞き、さらに家庭がうまくいくのに役立っているものを見る。うまくいっている要因を引き出し、さらに現実的な限界あるいは問題がどのように解決されるかを見定める。

第2の家の外側へと移動して、ワーカーは、「家庭がうまくいって安全が保たれるのに、親族（拡大家族）とのどんな関係が役に立っていますか？」と尋ねる。これは個人を特定する必要がある。個人の特質は、その人の役割が明らかになるように記述される必要がある。

次に、友人との好ましい関係を探し、どのようなタイプのサポートがどのように提供されたかについて、はっきりした像を手に入れる。ここでも相手の名前や具体的なことが重要であり、とりわけ、困難なときや必要なときに親/両親がどうやって利用したのかも探る。そして、関係を作って維持する際の親/両親のストレングスが確認できるように、彼らがどのように友人関係に貢献したかを探ることも有効である。

最後に、ワーカーは親/両親に、属しているコミュニティ、子どもをサポートする機関やグループについて考えるように求める。これは子どもが小さいときのことでもいいし、彼らが思いつく支援者や他のサポートでもいい。もしこれが難しいなら、彼らにかかわるコミュニティ関係者全員をブレインストームで引き出し、どこがどんなことをしてくれるのが彼らにとって役に立つのかを詳しく話し合うといい。

第1の家 ― 脆弱性

次に、ワーカーは第1の「脆弱性の家」に移動し、家族アイデンティティから始める。まず、自分たちを見て何か問題になるようなことはないかどうか、親/両親に尋ねる。その際、どのように他の人たちは彼らを見ているかを彼らに尋ねたり、第2の家と第1の家の違いをチェックしたりすることが有効かもしれない。ワーカーは「家族として自分には、自分や子どもの安全を保てなかったり、危害のリスクを高めるようなところがありますか？」と尋ねる。このようなリスクの例は、犯罪に関連するアイデンティティや、集まっては困難な問題を引き起こす一族につながるアイデンティティかもしれない。

脆弱性の中の2番目の構成要素は、家あるいは家族の中であって安全を低める思考と感情を扱う。ここでは、家庭間の相互作用や家の中での行動について話しあう。ワーカーが非審判的であること、そして彼らの観察が他者の視点で記録されることが重要である。もし親/両親が安全を低めるような対人行動を言いたがらないのなら、ワーカーはそれをはっきりさせる必要がある。どんなことが引き金となるのかを決めるために、いつこのような行動が生じるのかをワーカーが引き出せるとよい。

第1の脆弱性の中の中の3番目の構成要素は、困難をもたらしている環境問題を扱う。これらはお金がない、アルコール、薬物、食物がない、衛生状態が悪い、障害を含めた健康問題であるかもしれない。ある意味で、これらは家族に影響を及ぼす内部のストレスである。親/両親が何を見て何を特定するのかを、ワーカーが記録することが重要である。こうしたことの全部を、もう一度、子どもまたは青少年への危害を増やす要因と結び付けるべきである。

家の外に移動して、ワーカーは親/両親と一緒に、安全を促進するという観点からみて、親族のどんな行動が助けにならないか、あるいは誰がストレスを増やすかを探る。もし家族がこれら話しながらないのであれば、ワーカーの観察を挙げ、ワーカーの見解として位置づければよい。これらを家族と一緒に振り返ることで、児童保護機関がもつ懸念について有効に話し合うことができる。

外部の第2の外壁は、友人や社会的接触に関して同じ質問をする。他人への危害、あるいは他人からの危害、自分自身への危害、子どもたちへの危害について聞くといい。誰が助けにならないかと聞いたり、行動に注目したりすることで個人攻撃を減らすようにすること。第1の家と第2の家の両方で挙がる人もいるかもしれないが、そこから話し合いが生まれるので、それでいい。

最後に、第1の家の3番目の外壁として、コミュニティ要因の周りにあるものを扱う。これは家族の周りに存在する児童保護機関や他の組織である。もし、所属する児童保護機関の名前がここで挙がったり、児童保護機関への反発が示されたとしても、ワーカーは驚くべきではない。これは介入計画に役立つ道具であることを思い出し、そして、「私たちがここから第2の家の方に移動するためには、何ができるでしょうか？」と尋ねることが有効である。また、いくつかの機関や環境要因が両方の家で挙がるかもしれず、そのときはもっと突っ込んで話し合うと興味深い。

第3の家 — 希望、夢とゴール

第1の家が完成したら、ワーカーは希望、夢、ゴールの3番目の家に向かう。この家を見ることで、親/両親には家族がどんなふうであって欲しいかを探究する機会になる。これはまた彼らがどのように行動したいか、どのような感情を持ちたいかを見ることを含む。ミラクルクエスチョンのアイデアをここで使う。

次のような質問をする：

i. 「もし明日目がさめて、あなたの家族が本当に望んでいる状態になっていたら、何が違っているでしょうか？」

「状況が違っていると、どうやって気づくでしょうか？」

「他の人が立ち寄ったなら、その人はどんな違いに気づくでしょうか？」

ii. 「状況を変化させるのに、第2の家のどんな強さを使うことができるでしょうか？」

第1の家をふりかえりながら、

iii. 「弱み（脆弱性）が家を不安定にするのをおさえるために、第2の家の強み（ストレングス）をどのように使いますか？」

そして最終的に、

iv. 「3番目の家に到達するのに、ほかにはどんな助けを必要としますか？ 機関や外部のサポートなども含めてください」

3番目の家ができあがったら、ワーカーは家族に感謝し、「危害を減らして皆の安全を高めるためにはどうするのが一番いいかを話し合うために、すべての情報をまとめてみます」と述べる。

3. ワーカー

「三つの家」では最後に、家族状況への貢献要因としてワーカーを取り上げる。ワーカーの思考、感情、経験が家族に影響を及ぼさないようにすることは不可能である。実際、家族が安全を作り、危害を減らすのを手伝うことができるのは、ワーカーの存在である。しかし、「三つの家」モデルでは、ワーカーが家族と一緒に作業すると同時に、自分の影響を検討する時間をとらなければならない。ワーカーが「三つの家」モデルの自分自身の部分をスーパーバイザーと完成させることが最も効果的である。

ワーカーの場合も、「三つの家」モデルは同じコンセプトを使うが、適用の仕方は違う。すべての段階を通して、ワーカーは自分自身と自分が取り組んでいる家族の両方についてたえず振り返らなければならない。

第1の家 — 脆弱性

第1の家 — 脆弱性 — で、ワーカーは、最初の構成要素であるスピリチュアリティ/アイデンティティに関して聞かれる。「今、ワーカーとしての自己概念をどのように描きますか？ 家族の助けにならない面があるとすれば、それはどんなふうに関係とぶつかりますか？」それから、

スーパーバイザーは、「あなたが持っている信念と価値観に、その家族への危害のリスクを高めることになっているものがあるでしょうか？」と聞く。これはワーカー自身の文化と信念体系と生活経験のうち、専門性の危機に導く可能性のある領域を探る機会となる。スーパーバイザーは、虐待のタイプと育児行動を熟考し、ワーカーがこれらに関してどんな信念を抱いているかを尋ねることが重要である。間違っているとかが、評価されているとワーカーに感じさせるのではなく、意図せず危害の可能性を高めてしまう信念や価値観として認識させるためである。

脆弱性の家の2番目の構成要素では、家族に関する感情と思考、とりわけマルトリートメントのタイプに関するもので、うまく機能することを妨げるかもしれないものがあるかをワーカーに聞く。スーパーバイザーは、ワーカーがどのように家族に反応する傾向があるか、もっと広くみて特定の行動・行為に関してどう反応する傾向があるかをワーカーに尋ねることでこれを突き止めることができる。スーパーバイザーとワーカーが、どのようにこれらが役に立っていないか(どのように行動化されているか)、ワーカーと家族の相互作用にどんな影響を与えているかもしれないかを、判断することが重要である。

家の内側の第3の構成要素は、子どもの安全を高めない方向でワーカーが動いてしまうような健康上の問題である。スーパーバイザーとワーカーは、ワーカーが心身の健康に関してどんな状態か、そして何か懸念があるかどうかを探る必要がある。これにはストレスも含む。

第1の家の外に移動して、スーパーバイザーとワーカーは、ワーカーの介入に影響があるかもしれないワーカー自身の家庭または家族に関する懸念がないか調べる。例えば、ワーカーの家族とケースに類似性がある中立性を減らすような状況があること、ワーカーの家族内にストレスあるいは要求が存在し困難なことが起きるかもしれないこと、などである。

友人の構成要素については、ワーカーが所属している児童保護機関に置き換える。人材配置、期待、作業量に関する現在の懸念を確認する。いかなる制約にも注意を払う。さらにここで、スーパーバイザーが他者の視点から付け足す機会をもつ。双方にとってうまくいかない面があるかもしれないので、スーパーバイザーとの関係そのものも吟味する。

第1の家の3番目の構成要素では、他の機関を含めたコミュニティのうち、ワーカーから見て困難を作ったり安全を増進させない類のものを列挙する。機関間の対立やよくない関係があるかもしれない。ワーカーによる家族とのやりとりに影響を与えることは、記載される必要がある。

第2の家 ― ストレングス

第2のストレングスの家へと移動して、スーパーバイザーとワーカーは、ワーカーの信念や価値観を通して安全を高めるスピリチュアリティあるいはアイデンティティについて話し合う。スーパーバイザーは、ワーカーの信念や価値観が対象の子どもにどうつながっているかを話し合い、ワーカーに過去の事例で信念や価値観と関係していた行動の例を挙げてもらふ必要がある。ワーカーの文化的背景のうち、家族を支援するのに役立つストレングスとなるものについては、ここで取り上げる。

ストレングスの家の2番目の構成要素では、その家族と起きていることについてワーカーが考えたり感じることを挙げる。ワーカーの介入を助けるような、家族に関する肯定的な思考と感情とについて振り返る機会となる。これは、ワーカーが見たことや聞いたことにつながるかもしれない。

ストレングスの家の3番目の構成要素では、ワーカーの心身の健康的な面や、使えるエネルギーを生み出すサポート、何かを提供して家族を助けることについてワーカーがどう感じているかを扱う。

ストレングスの家の1番目の外壁では、ワーカーの家庭生活と家族が、どのようにワーカーに支えとストレングスをもたらしているかを探る。ワーカーが仕事に出かけ仕事から帰る基盤として、これらを扱う。このようなストレングスによって、ワーカーは対象家族との関わりに積極的に取り組める。

2番目の外壁では、共同担当者、チーム、スタッフの意欲、職場で近くにいる人たちのエネルギーと熱意など、児童保護機関の肯定的な面を探る。スーパービジョンがどのようにワーカーを支えているかに関して検討できるし、事例に対して何が提供できているかという観点からスーパービジョン関係を検討できる。

最後に検討するのは、その他の福祉サービス関係機関、特にケースに関してワーカーを支える関係とネットワークについてである。これはワーカーを支える外部構造を形成しており、家族のためのリソースを明らかにする。ストレングスを挙げることは、ワーカーの孤立を減らすことにもつながるし、機関間のコミュニケーションと連携の強化にも役に立つ。

第3の家 ― 希望、夢とゴール

3番目の家で、スーパーバイザーとワーカーは当該家族に関してワーカーが抱く希望とゴールについて検討する。

スーパーバイザーは次の質問を行う。ワーカーは、その質問に答えるために、スーパービジョンのセッションにこの質問を持ってきてもいい。

- i. 「もし、家族の問題のすべてが解消したとしたら、何が違ってくるでしょうか？ どういうことから、それがわかるでしょうか？」
- ii. 「この家族のことでいろいろ変わったとしたら、子どものことではどんな変化が出てきますか？」
- iii. 「あなたはこの家族について、どんな希望、夢とゴールがあると思いますか？」、そして「どんなことが出てきたら、このケースを終結していいとわかるでしょうか？」
- iv. 「それが起こるために何をする必要がありますでしょうか？」
- v. 「あなたの2番目のストレングスの家がそれを実現するのを手伝ってくれるとすると、それはどんなことでしょうか？」
- vi. 「あなたがそれをするのを一つめの脆弱性の家が邪魔するかもしれないけど、二つめのス

「トレングスの家はどんなふうにそこを助けてくれるでしょうか？」

このような質問によるやり取りにより、ワーカーに家族がどうなったらいいかを考えさせ、3番目の家を作り上げる。

それぞれの人と一緒に作ったツールが完成したら、介入計画策定を始めるための情報一式ができあがる。まず、ワーカーは、自分のものを含めてそれぞれの人の家の要約をつくる。第1の家から始め、ポイントとなる脆弱性と危害を増やす要因を書く。これらは個別的なことも全般的なことも、それぞれの人の見方も含め、列挙する。

ワーカー自身のものも含めて、脆弱性が明らかになったら、ワーカーは全員の「第2の家」からそれぞれの人が自分とその周囲の人に対して使えるストレングスは何かを明らかにする。なお、ここで使うストレングスとは、脆弱性をおさえて、3番目の家で挙げられたゴールのリストの実現に向けて働くものである。これらを脆弱性のリストのとなりに置く。

最後に、ワーカーは、全員の「3番目の家」を用いて、それぞれの人の希望、夢とゴールのリストを作る。特にワーカーは共通の目的があきらかになるように、共通点を探し出す。それぞれの人の独自のゴールも記載される必要がある。ゴールのリストは少し空間を空けてストレングスのリストの横に置く。

その空間は、ストレングスのリストと脆弱性のリストから「希望と夢の家」までの道のりを示している。ワーカーは、家族が望む新しい家に行くのを手伝うためにストレングスを積み上げ脆弱性に対処しながら、誰がどんな支援を得て何をするかを決めるために、家族と面接をする必要がある。

このような話し合いを持つ理想的な方法は、ファミリーミーティングである。ファミリーミーティングでは、ワーカーは、児童保護機関の関与が必要になった危害要因に関して、現在は何が懸念されるかをあげることから始める。ワーカーは、これらの懸念にどう対処することができるかを探すために、参加者全員が集まっていることを説明する。それから、ワーカーは、全員が家のコピーを持つようにして、全員の家の要約情報を説明し、そこには重要な情報があれば何でも付け足すように言う。ミーティングの目的は、「脆弱性の家」に心を配りながら、「ストレングスの家」を「希望と夢とゴールの家」につなげるためには何が必要かを見つけることである。

道のりは、一人ひとりが取り組むステップと課題がはっきりしていて、具体的で測定可能なものである必要がある。人々が取り組むステップや課題ごとに、彼らの能力、自信、意欲についてチェックされるべきである。人々がその計画に自信を持てるような小さな目標をおくことが重要である。参加者の誰もが、「希望と夢の家」を実現するための自分の次のステップがはっきりわかって、ミーティングから帰れるといい。ワーカーは、人々のストレングスやリソースを常に踏まえ、どうしたら未来の安全と変化を作るのに役立つようにそれらを働かせようかを話し合わなければならない。ワーカーはまた、脆弱性や、ゴールの達成を邪魔するものについて率直に考え、これらを乗り越える方法を見出さなければならない。

ワーカーは、人々の三つの家、とりわけ「希望と夢とゴールの家」に力を貸し、ゴールの家へのプロセスのために人々が提供しなければならないものに力を貸す必要がある。このプロセスの終わりまでに、誰もが、明確な課題を持ち、自分の進み方を見るレビューの機会を持つことになる。そこで、ワーカーは人々と会って、彼らの課題を振り返り、なされた前進を確認する。ワーカーはまた、自分のスーパーバイザーと会って、自分の課題や脆弱性にどう対処しているかをチェックする必要がある。

時間的な問題があるときは、ファミリーミーティングやファミリーグループカンファレンスの中で、三つの家を使い始めることもできる。まず人々を集ませた心配事を要約することが有効である。それから関係者全員の「希望と夢の家」を話し合うことから始めるのがいい。さらに、ストレンクスを見つけ、それから脆弱性に進むのが有効である。ストレンクスを挙げた後だと、人々は自信を持って脆弱性を分かち合いやすくなる。その後、一人ひとりの考えから「希望と夢の家」への道のりを作る。このやり方だとやや一般的な話し合いになるが、ストレンクスを特定し、他の人々が考え感じていることを聞く機会を提供する利点はある。

「三つの家」モデルは、心配事だけでなくストレンクスをも特定し、そしてどうしたらストレンクスが脆弱性に抗って未来のゴールに貢献するリソースになり得るのかを見出す機会となる。このモデルはまた、家族によって作られる情報を集めることを意図しており、それゆえにいろいろな家族の見方を集めることができ、子どもや青少年にとって家族はかけがえのないものであることを再認識することになる。このモデルでは、ラポールと、施す (doing to) とか尽くす (doing for) とかではない協働 (doing with) のプロセスを創り出すようにデザインされている。また、このモデルは本来的にホリスティックかつシステムミックであり、情報を求めて常に過去に戻る必要が少なくなる。共通のゴールを創り出すことによってまとまるようデザインされており、児童保護機関を含めて誰かの意見が犠牲にされることを求めている。三つの家はどんな順序で用いられてもよく、ワーカーは出てきた情報に基づいてさらに質問することができる。最終的には、このツールは児童保護機関のものではなく家族のものであり、ワーカーが家族に関わる時にどんな貢献ができてどんな影響を及ぼすかを再認識させてくれるものである。

引用文献

- Durie, M. (1998) *Whai ora, Maori Health Development*. Oxford University Press. Auckland.
 De Shazer, Steve (1985) *Keys to solution in Brief Therapy*. WW Norton and Company. New York.
 Turnell, Andrew and Edwards, Steve. (1999) *Signs of Safety -a Solution and Safety oriented approach to Child Protection Casework*. WW Norton and Company. USA.

訳者付記

本翻訳は、平成 18 年度科学研究費補助金 (基盤研究 C) (課題番号: 18530551, 研究代表者: 井上直美, 研究課題名: 児童虐待の再発防止のための親教育プログラムに関する研究) の一環として行われた。

訳者注

ニュージーランドの先住民のマオリ族の健康幸福に関する考えは、Durie (1994) によれば、霊的 (スピリチュアル) な健康、心理的な健康、身体的な健康、家族的な健康の4側面から成る。

レジリエンス理論は、主として Wolin & Wolin (1993)⁶ による。

解決志向理論は、De Shazer と Berg による。

サインズ・オブ・セイフティ・アプローチは、Turnell & Edwards (1999) による。

ストレングスアプローチは、主に Saleebey (2002)⁷ による。

著者によれば、子どもや青少年との面接では、より理解されやすいように「くしゃみ (Hiccups) の家」「心配 (Worries) の家」と言い換えることもできる。

虐待やネグレクトを含む不適切な養育一般を言う。

訳者引用文献

- 1 Weld, N. & Greening, M. (2004) *The Three Houses*. Social Work Now. 29. Child Youth and Family, New Zealand. pp. 34-37.
- 2 菅野道英 (2007) 「第6章 実践 児童相談所の取り組み — 虐待家族への支援 —」谷口卓・末光正和編 『実践から学ぶ児童虐待防止』 pp. 91-109. 学苑社
- 3 井上薫・井上直美 (2007) 「サインズ・オブ・セイフティ・アプローチ入門」『そだちと臨床 vol. 2』 pp. 125-126. 明石書店.
- 4 宮井研治 (2006) 「『子どもと共に安全のサインを探す』～サインズ・オブ・セイフティ・アプローチを用いて家族と家庭復帰に向けてのアセスメントを行った事例について～」日本ブリーフサイコセラピー学会第16回横浜大会プログラム・抄録集. p. 34
- 5 菅野道英 (2006) 「児相におけるサインズ・オブ・セイフティ・アプローチの活用 その2 実際編」全国児童心理司会会報 第150号, pp. 2-6.
- 6 Wolin, S. & Wolin, S. (1993) *The Resilient Self. How survivors of troubled families rise against adversity*, Villard Books, New York.
- 7 Saleebey, D. (2002) *The Strengths Perspective in Social Work Practice*. Allyn & Bacon, Boston.